甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅳ

昭和58年3月

島根県 隠岐島後教育委員会

例　　言

1. 本書は、隠岐島後教育委員会が国庫、県費補助を受けて、昭和５７年度に甲ノ原遺跡において実施した発掘調査の概報である。調査は、同補助を受けて、昭和５４年度から継続的に行っているものである。

2. 調査は、近い将来に予想される開発にそなえて、遺跡保護対策を立てるための基礎資料を得る目的で行われたものである。

3. 調査組織

調査指導	勝部　昭	島根県教育委員会文化課係長
	松本　岩雄	島根県教育委員会文化課主事
	村尾　秀信	同　上
	若林　久	隠岐島後文化財専門委員
	野津　徳重	同　上
調 査 員	門脇　裕	隠岐島後教育委員会社会教育課係長
	金崎　慎二	隠岐島後教育委員会社会教育課主事
	横田　登	隠岐島後教育委員会社会教育課嘱託
事 務 局	谷田　義治	隠岐島後教育委員会社会教育課長
	田中みゆき	隠岐島後教育委員会社会教育課職員

4. 調査にあたり、土地所有者の谷田喜之吉、隠岐年郎両氏には多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

5. 現場における発掘作業に参加、また、ご協力をいただいた下記の方々の名を記し、感謝の意を表する次第である。

（敬称略、五十音順）

池田静子、小田原秋子、芝岡徳長、芝岡政子、中西町子、根本猛、船田勉、船田ユキ子、前田秀子、室山みどり、門崎幸子、山根康子

6. 本書の編集、執筆は、調査指導の先生方の助言を得ながら門脇裕、金崎慎二、横田登の協議のもとに行った。

7. 挿図中の矢印は真北を指す。なお、西郷における磁気偏角度はＮ７°００Ｅである。

8. 本書中の高さはすべて海抜高である。

9. 遺構表示は次のとおりである。なお、遺構番号は昭和５４年度調査からの通し番号で表示してある。

ＳＢ	掘立柱建物跡、礎石建物跡	ＳＫ	土壙　瓦溜め
ＳＡ	柵列、柱穴列	ＳＤ	溝跡、溝状遺構

目　　次

Ⅰ　調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 4

Ⅳ　遺構と遺物 …… 6

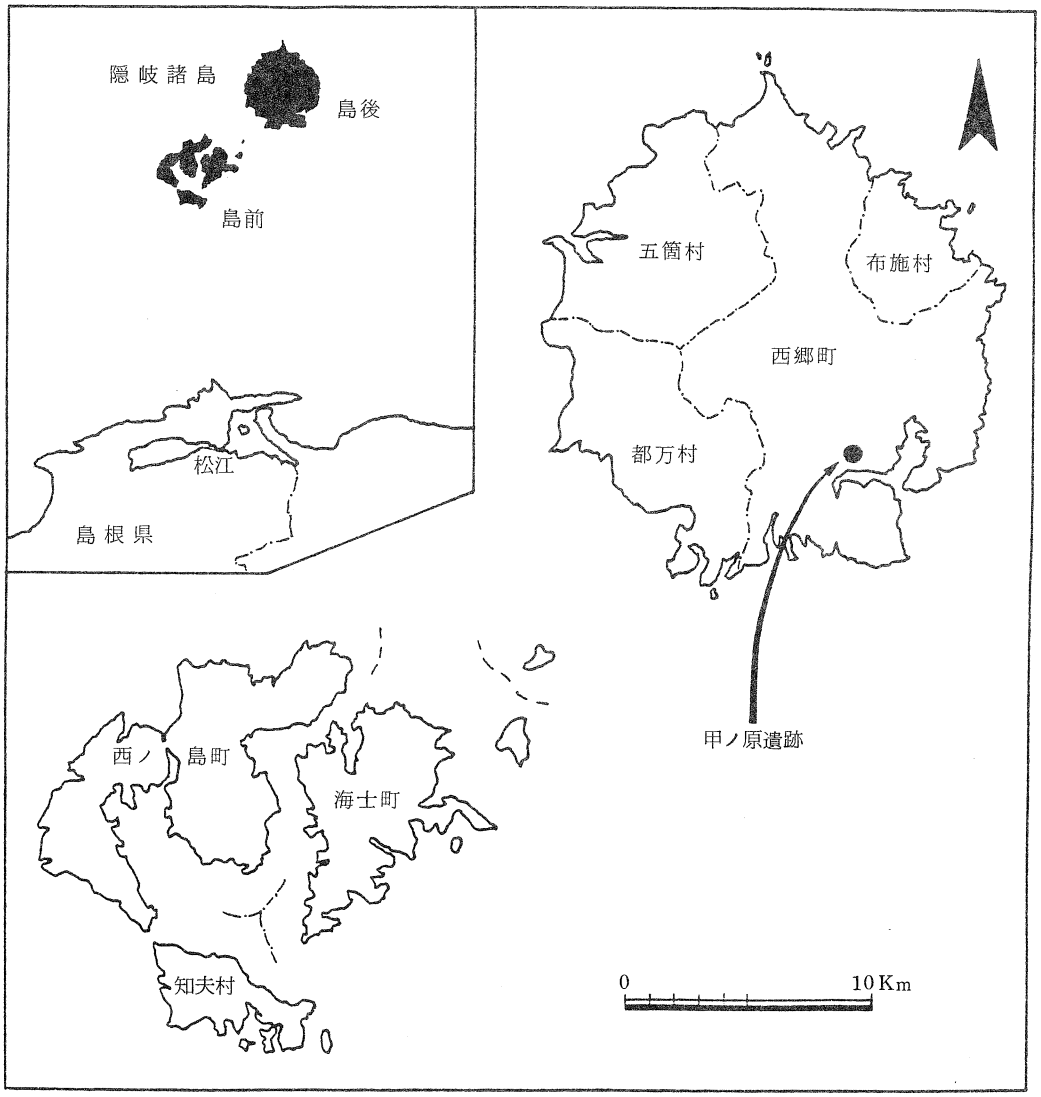
Ⅴ　おわりに …… 10

Ⅰ 調査にいたる経過

甲ノ原遺跡の所在する島根県隠岐郡西郷町下西（しもにし）地区は、以前より、縄文期から中世に至るまでの長い時代範囲にわたって、多数の土器片、石器片等が発見されており、古墳の分布密度も非常に高い所でもある。また、文献などからも隠岐国府の所在地の一つとしても推定されている。

昭和５４年度から毎年、国、県より補助を受けて発掘調査を行い、８世紀代の公的建物と思われる数棟の掘立柱建物跡を検出することができたが、前年度までの調査の成果では、その性格を決定づけるところまではいっていない。

このような状況の中で、昭和５７年度も昭和５８年１月より発掘調査を実施した。



遺跡位置図

Ⅱ 遺跡の位置と環境

甲ノ原遺跡は島根県隠岐郡西郷町下西に所在する。隠岐諸島は島根半島の北東約４０～８０㎞に位置し、四つの住民島と数多くの無人島から成っている。その中で面積２４６㎢の島後（どうご）は最大の島で、当遺跡はこの島後にある。

下西地区一帯は数多くの遺跡が分布し、早くから拓けたところで、古代～中世の隠岐国の中心地と推定されている。

縄文時代の遺跡としては、前期末葉から後期末葉にかけての下西海岸遺跡、後期から晩期にかけての大将軍遺跡などがある。下西海岸遺跡では玦状耳飾り、Ｘ形石鏃など特異なものも発見されている。また、島後は石鏃などの主要原材料である黒曜石の産地でもある。

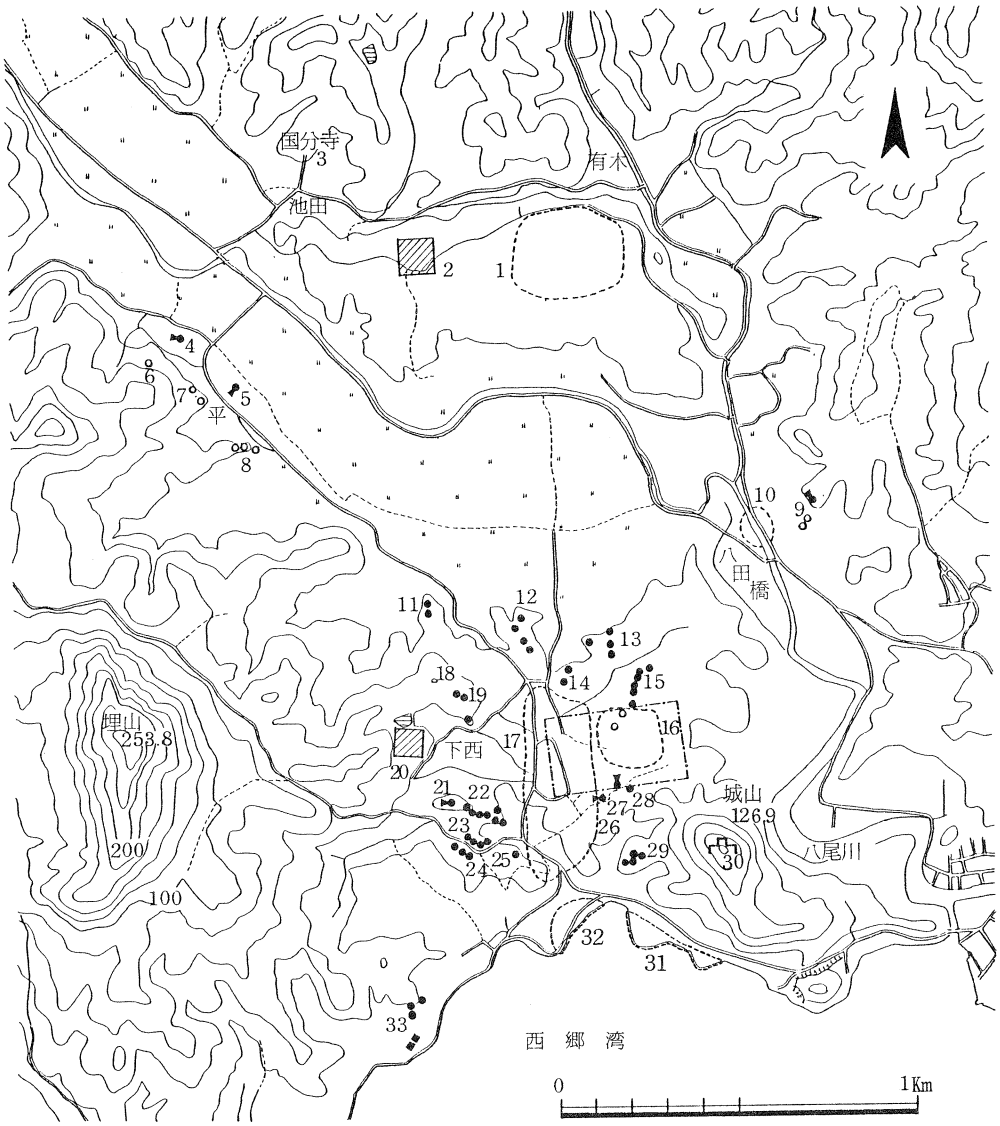
弥生時代の遺跡としては、月無（つきなし）遺跡、大城（おおしろ）遺跡がある。月無遺跡は、八尾（やび）川の河川改修工事中に発見されたもので、土器をはじめ、耕作用具、クルミ等が採集されている。遺構は列状に並んだ木杭が検出されているが、性格は分かっていない。大城遺跡からは、祭祀用と思われる特殊な器形の壷が発見されている。肩に３個の子壷があり、スタンプによる紋様が施してある。弥生時代の遺跡は島後全域を見ても発見例が少ないが、これは前述の月無遺跡が西郷湾の平均水面より下で発見されたことを考えると、弥生期の遺跡は、他でも深く眠っているものと思われる。

古墳時代に入ると当地にも数多くの古墳が築造されている。発掘調査例が少なく、実態は断言しにくいが、４世紀代の古墳は今のところ見つかっていない。５世紀代の古墳としては斉京谷北古墳群がある。この斉京谷北古墳群のうち円墳２基（１号墳、２号墳）と大座古墳群では発掘調査が行われ、斉京谷北１号墳では礫床２基が確認され、直刀、鉄斧頭等が出土している。大座古墳では、盛土の少ない、木棺直葬の方法を採っている。

６世紀に入ると、全長３０～５０ｍの前方後円墳が出現し、周辺には多数の小円墳も営まれるようになる。前方後円墳の代表的なものをあげると、玉若酢命神社西方古墳、国府原（こうのはら）２号墳、二宮神社古墳などがある。さらに１２００ｍ程西北方には、平神社（へいじんじゃ）古墳、子安神社古墳がある。平神社古墳は全長４７ｍ、墳丘高５ｍ余の島後では最大級の古墳である。くびれ部近くに横穴式石室が開口しており、自然石、割石積みの持ち送り方式を採っている。玉若酢命神社西方古墳は良く原形をとどめており、墳形等から見ると、これらの前方後円墳の中では古い形式に属すると思われる。主軸をほぼ東西にとり、墳丘長３３ｍを測る。

奈良朝以降の遺跡についてみると、すぐ北側の八尾平野には条里田の遺構が確認されている。さらに１５００ｍ程北方には国分尼寺跡があり、その近くには隠岐国分寺（僧寺）が現存する。西方には国分寺と同じ頃建てられたと思われる権得寺（ごんとくじ）跡や、隠岐国総社玉若酢命神社がある。また、この時代の隠岐国は、大陸、朝鮮半島に対しての国防上の重要な拠点の一つであったことも文献などから認められる。

このように当遺跡周辺は、本土側と比較した場合、若干の後進性が見られる時代はあるもののほぼ併行して文化の波及が見られ、奈良時代に入り、国分二寺創建の頃になると、中央文化の吸収には多大の努力を払ったものと思われる。



調査地周辺の遺跡分布図

調査対象地　遺物包含地　前方後円墳　円墳　方墳　墳形不明　寺院址　城跡

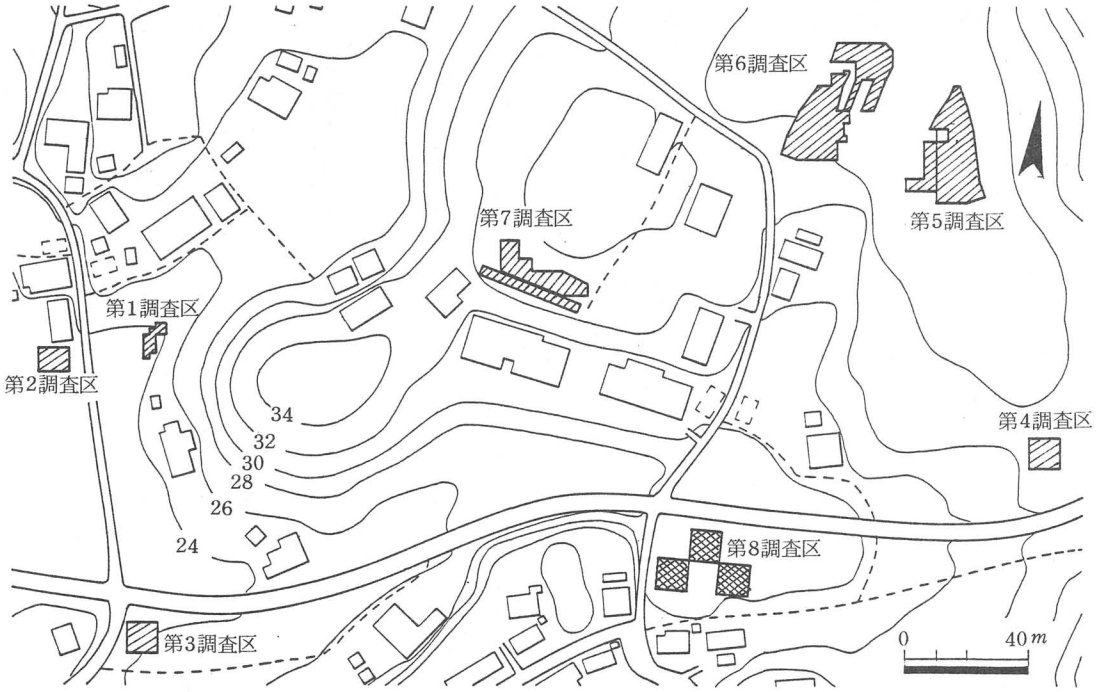
1. 尼寺原遺跡　2. 隠岐国分尼寺跡　3. 隠岐国分寺　4. 平神社古墳　5. 子安神社古墳　6. 平西古墳　7. 平東古墳群　8. 中山古墳群　9. 名田古墳群　10. 月無遺跡　11. ヒノメサン古墳群　12. 小田原宅裏古墳群　13. 斉京谷北古墳群　14. 斉京谷南古墳群　15. 斉京谷古墳群　16. 能木原遺跡　17. 甲ノ原遺跡　18. 御薗神社古墳群　19. 椿古墳　20. 権得寺跡　21. 玉若酢命神社西方古墳　22. 玉若酢命神社古墳群　23. 玉若酢命神社境内古墳群　24. 玉若酢命神社南方古墳群　25. 億岐氏裏山古墳　26. 二宮神社古墳　27. 国府原2号墳　28. 七人塚古墳　29. 白髪古墳群　30. 国府尾城跡　31. 下西海岸遺跡　32. 西森氏宅裏遺跡　33. 大座古墳群

Ⅲ 調査の概要

調査は前三カ年の調査結果を基に検討を加え、候補地をあげた。前年度までの調査で公的建物と思われる掘立柱建物跡が検出された第５・６調査区の周辺は、栽培作物の関係で発掘調査はできなかったが、そこより約１５０ｍ程南方のやや谷状に落ち込んだ部分、能木原４８２－1、４８２－４及び４８３－４の地（以下第８調査区と呼ぶ）を発掘調査することができた。この地は以前畑として使用されており、数段の段差があったということであるが、現在は北側がやや下がってはいるが、土盛り等でほぼ平にしてある。

調査区の設定にあたっては、前三カ年に組んだ方眼とは別にし、この第８調査区の地形に合わせて方眼を組むことにした。能木原４８２－４の地の道路際に基準点を設定し、南北線（磁北に対して約６°東に偏している）と、それと直交する東西線を座標軸にして、2×2ｍの方眼を組んでグリッドの一単位とした。南北線は南から北へ２ｍ進むごとに、ＮＩ、Ｎ２、Ｎ３……とし、同様に東西線は西から東へＥＩ、Ｅ２、Ｅ３……とし、グリッド名は北東コーナーの交点の記号で呼ぶことにした。なお、前述の基準点をＮ１００、Ｅ１００とした。

調査は１０ｍ四方の大グリッドを三カ所（Ａ、Ｂ、Ｃグリッドと呼ぶ）設けて実施した。発掘調査総面積は３００㎡である。以下各大グリッドごとに概要を述べる。



調査区配置図

1．Aグリッド（Ｎ９６～１００、Ｅ１０１～１０５）

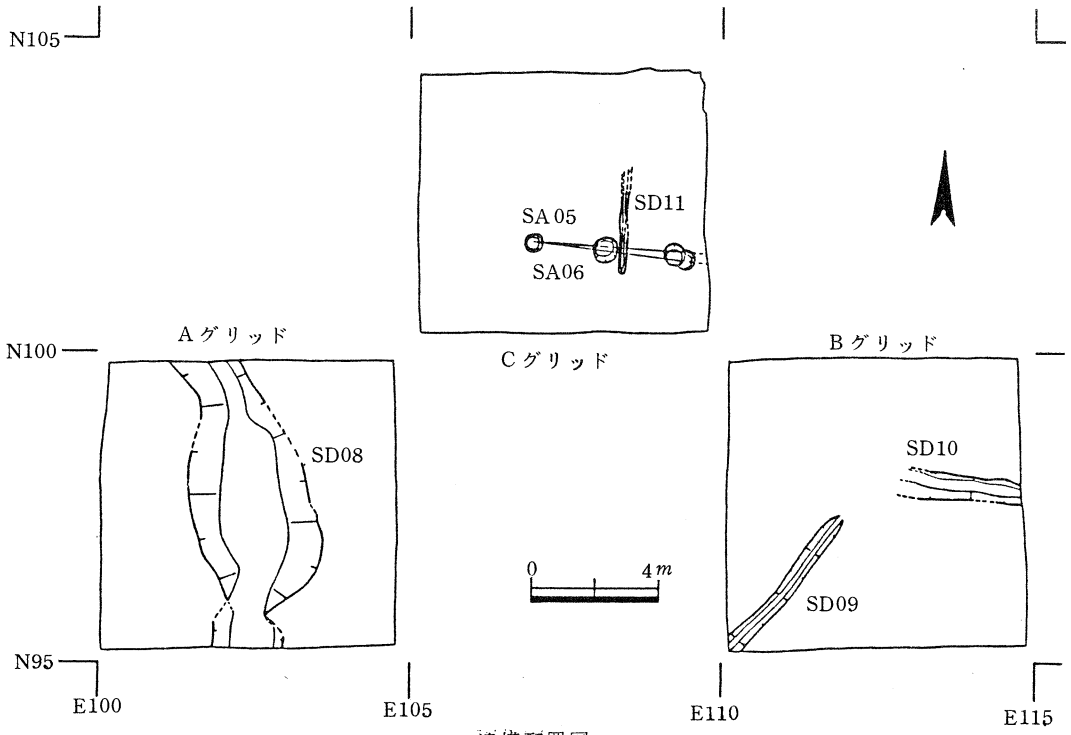
地表面は北に向かって緩やかに下がっている。グリッドの南西コーナーあたりでは地表面下約２０～３０㎝位で地山面に達するが、北に向かってすぐ段差（畑として使用するための新しい開墾によるものと思われる）があり、グリッド北側では地山面まで１００㎝近くを要す。グリッドの西側（Ｅ１００ライン）に沿って水道管が埋設されており、この部分は調査不能であった。遺構は、グリッド中央を南北に走る溝状遺構（ＳＤ０８）が検出された。遺物は表土層あるいはＳＤ０８から須恵器片、土師器片、黒曜石片が出土している。

2．Bグリッド（Ｎ９６～１００、Ｅ１１１～１１５）

このグリッドは地表面で段差があり、東南側は一段高くなっている。この部分では約１０㎝前後で地山面に達するが、北西側では１００㎝前後を要す。遺構は溝状遺構２（ＳＤ０９、ＳＤ10）が検出されている。柱穴もいくらか見つかっているが、柵列・掘立柱建物跡等に想定できるものはなかった。須恵器片、土師器片、黒曜石片が出土している。

3．Cグリッド（１０１～１０５、Ｅ１０６～１１０）

北側（Ｎ１０５ライン）に沿うように水道管が埋設されており、地籍測量用のクイも設定してあるなど、調査不能な所があった。また、地山面までかなり深く、北側部分では２００㎝近く掘り下げても地山面は検出できなかった。排水作業も困難を極め、中途ではあったが調査を打ち切らざるを得なかった。南側の地山面（地表下約１００㎝前後）では柵列２条（建て替えを含む。ＳＡ０５、ＳＡ０６）、溝状遺構１（ＳＤ１１）が検出されている。遺物は同様の出土状況であった。

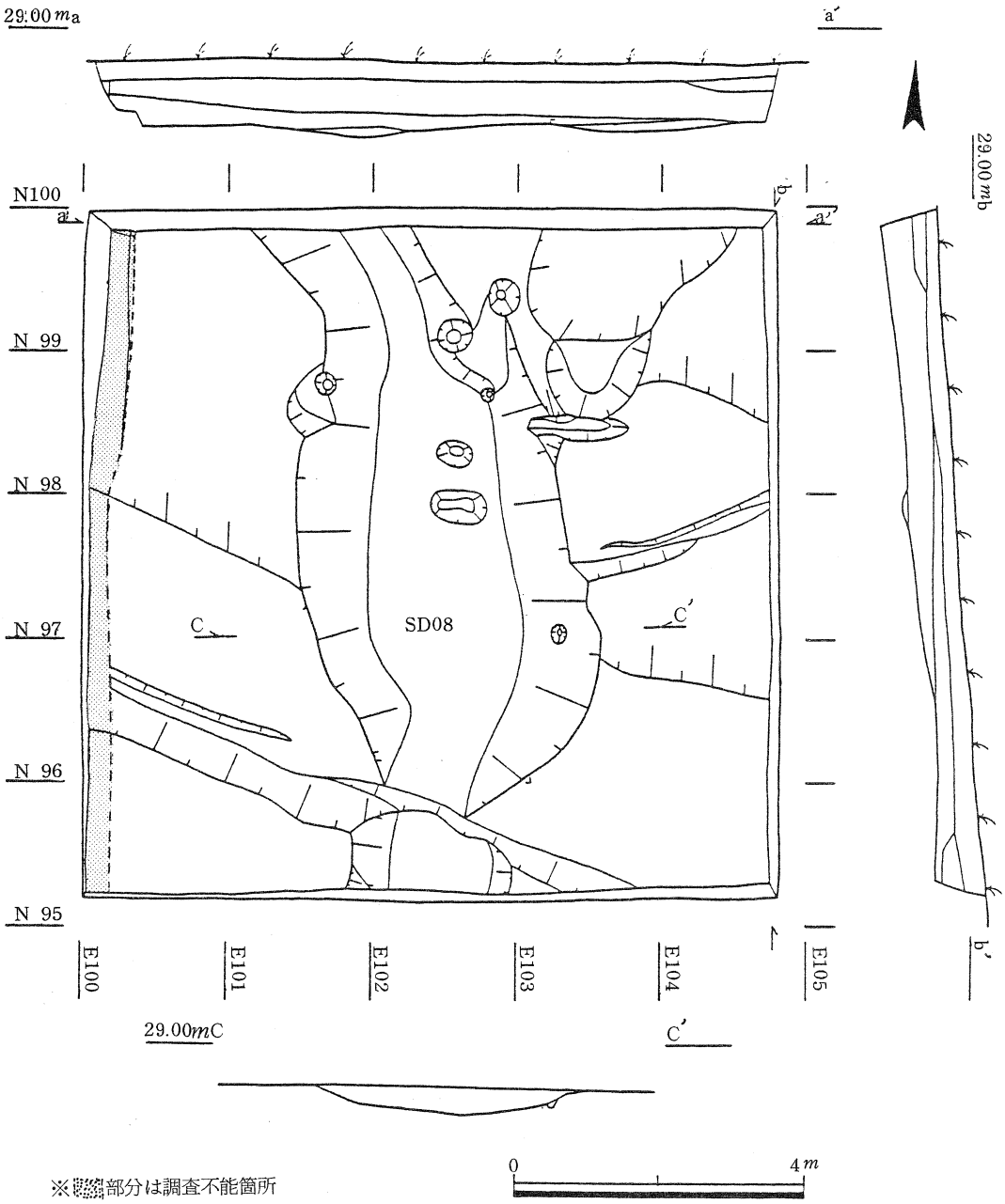


遺構配置図

Ⅳ 遺構と遺物

1 遺 構

ＳＤ０８ ほぼ南北に走る。前節で述べたように新しい開墾によるものと思われる段差によって切られているが、埋土の状態、伴出遺物等から判断して一つのものと思われる。上端幅は200



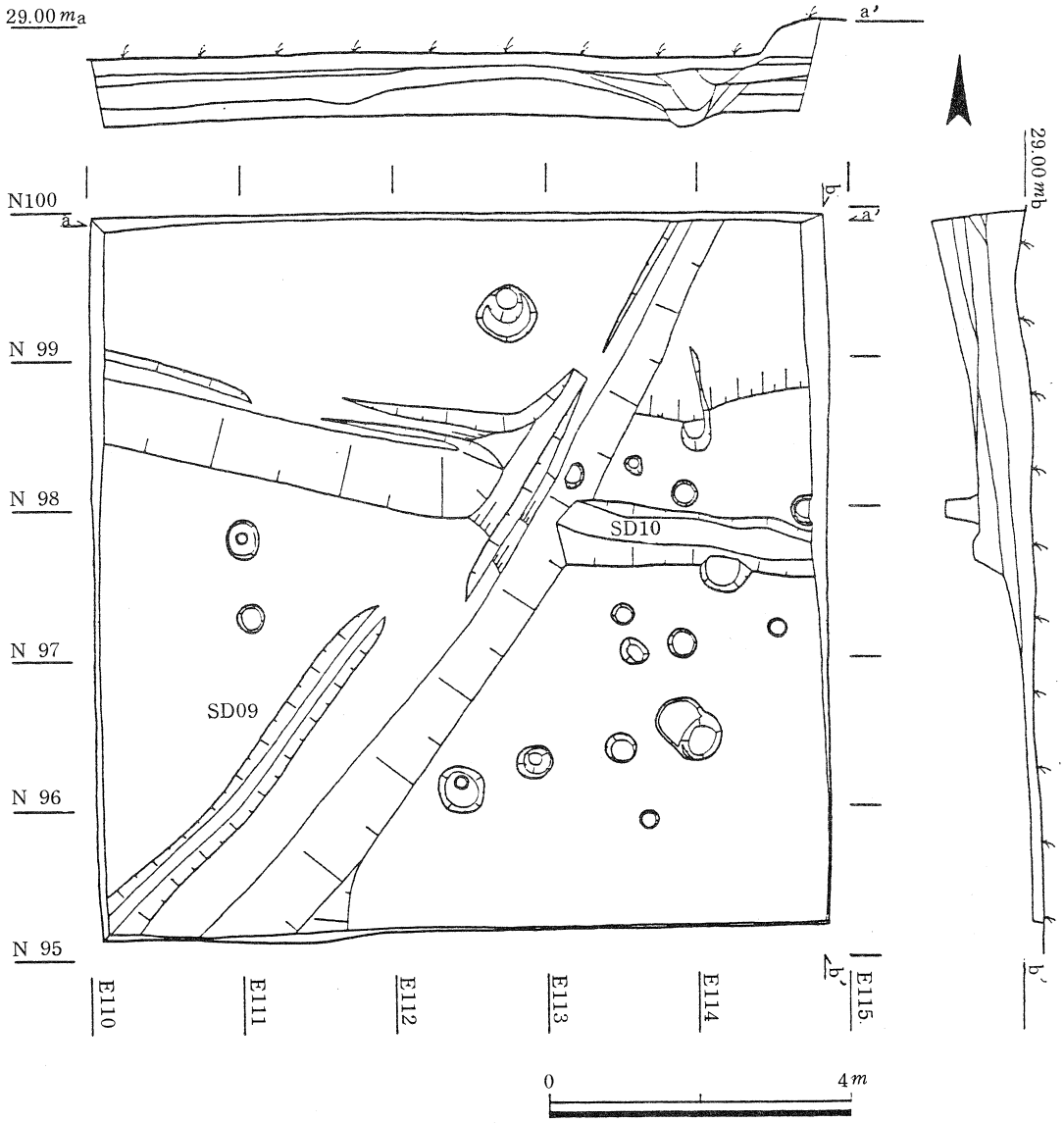
※▒部分は調査不能箇所

Ａグリッド実測図

～３００㎝、底部幅は５０～１００㎝前後で、上端から底部にかけては緩やかに傾斜している。底部も平ではなく、大きな弧を描くような断面状態である。残存部分の深さは２０～３０㎝前後で、埋土は単層で、かなり良くしまっている。７世紀代のものと思われる須恵器の宝珠状のつまみ（後述）が出土している。

ＳＤ０９　非常に浅いもので、埋土も軟質なものである。伴出遺物はない。畑作時代の排水用の溝の痕跡とも思えるが、一応ＳＤ０９としてとりあげた。

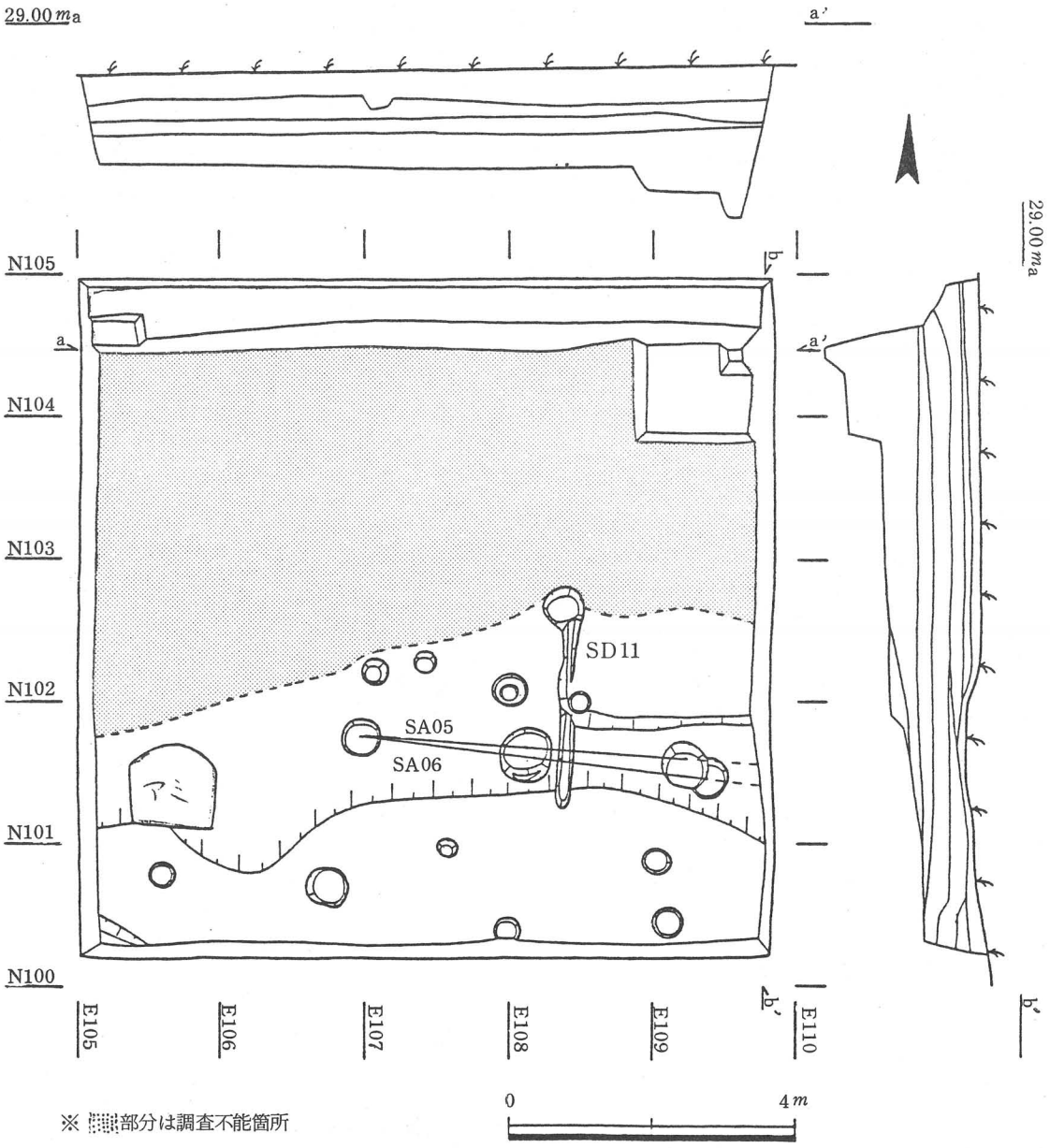
ＳＤ１０　検出部分は約４ｍ前後である。ほぼ東西に走るもので、埋土は良くしまっている。伴出遺物はない。性格、年代等は不明であるが、このＢグリッドで検出された柱穴群の一つと切り合い関係になっており、それを見ると、この柱穴よりは新しいものである。



Ｂグリッド実測図

ＳＤ１１　ほぼ南北に走る。検出部分は約３m程で、浅く、規模の小さなものである。前節で述べたように、中途で調査を打ち切ったため北側部分は不明であるが、まだ北側に延びるものと思われる。図で分かるように一つの柱穴と重なっているが、切り合いを見ると、この柱穴よりは古いものである。

ＳＡ０５・０６　東西方向に２間分だけ検出されているが、東側にはまだ延びる可能性がある。検出された柱穴西側より、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３と仮称すると、Ｐ１については柱穴の重複は認められなかったが、Ｐ３については明らかに２つの柱穴の重複が認められた。Ｐ２については、



※ ▒部分は調査不能箇所

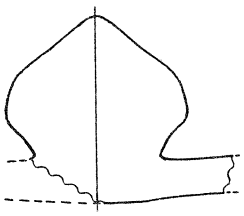
Ｃグリッド実測図

埋土からは重複は確認できなかったが、その平面形の規模から、２つの柱穴である可能性は大きい。以上の点から、やや危険ではあるが、この柱穴列を建て替え分を含めて２つの柵列として取り扱うことにしたものである。Ｐ３の切り合い関係からＳＡ０６の方が新しいことが確認された。柱穴径は４０～５０㎝前後で、残存部分の深さ４０㎝前後である。性格、年代等については不明であるが、Ｐ２から土師器の小片が出土している。

2　遺　物

〔須恵器〕

いずれも小片で形の不明のものが多いが、器種としては坏、蓋、甕等である。甕は、小片から判断すると、かなり大形のものが多いようである。形の分かるものとしては、宝珠状のつまみが一点、ＳＤ０８から出土している。口縁部の状態が分からないので断定しにくいが、大きく幅をとって８世紀代を中心とするものとしておきたい。



SD08出土（現寸）

〔土師器〕

須恵器と同様に小片で、特に土師器は摩耗が激しく詳細は不明である。ただ、内面を黒く塗った、いわゆる黒色土器が大半を占めている。黒色土器は関東地方では古墳時代後半頃から見られるものであるが、西日本では類例の少ないものである。島後の他地域を見ても出土例があり、当地において、この黒色土器の出土例が多いという事は、注目に値するところである。

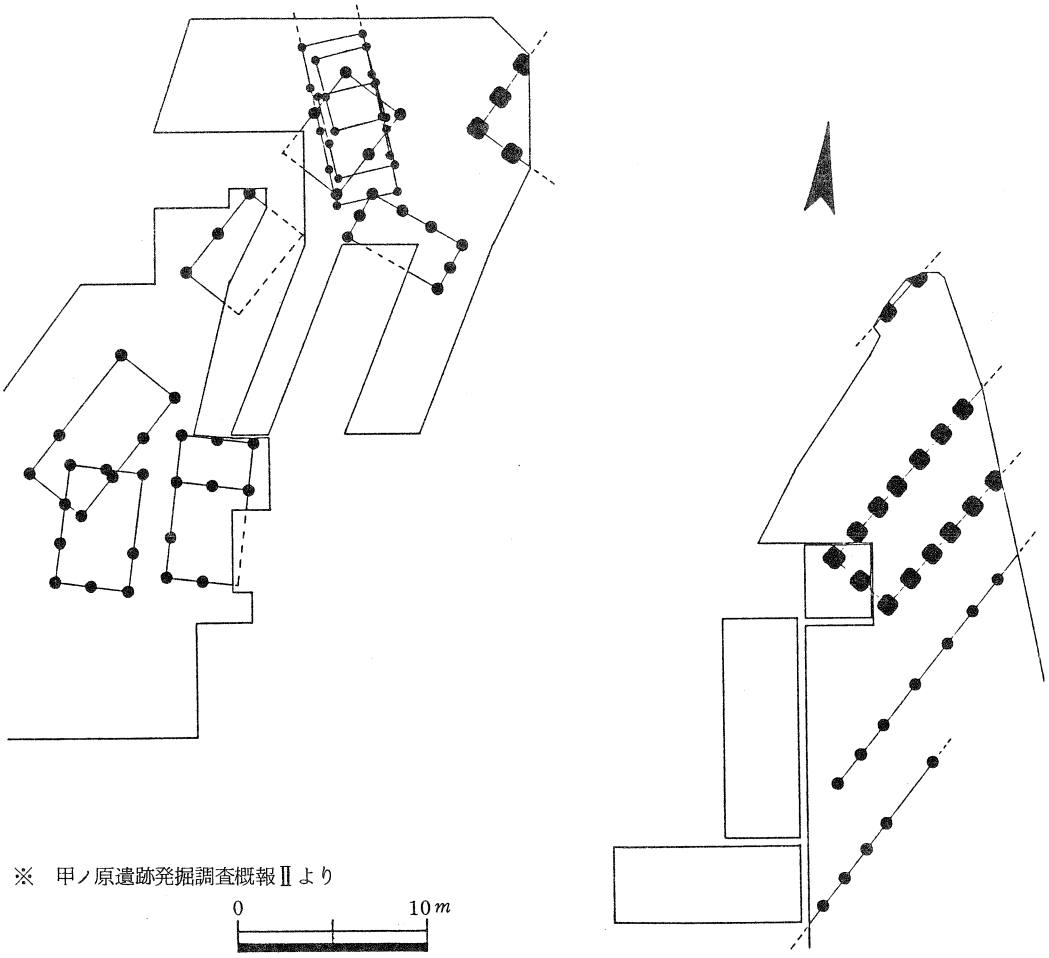
〔黒曜石〕

黒曜石片は、表土層を初め、各層や、ＳＤ０８等から万遍なく出土している。かなりの数量ではあるが、製品と認められるものは一点もない。ただ、島後には黒曜石の産地があり、この甲ノ原遺跡の調査においては、どこの調査区でも量の多少はあるが、必ず出土している。山陰地方の数多くの遺跡から出土した黒曜石製品は、そのほとんどが島後産のものと言われているが、正確な分析がまたれるところである。

V おわりに

これまで項を分けて述べてきたように、本年度調査においては、甲ノ原遺跡の性格を決定づけるような遺構・遺物の検出はできなかった。ただ、前三カ年の調査結果を見ても、「調査にいたる経過」の項でも述べたように、当甲ノ原遺跡が重要な遺跡であることにかわりはない。この項では、今後の課題として若干の考察を加え結びにかえたい。

下に掲載してある図は、当遺跡の台地上で発見された掘立柱建物群を模式化したものであるが、これを見ると、その規模・配置等から公的建物としての性格が強い。当地においては、9世紀前の公的建物と思われる掘立柱建物跡は少なく、極論すれば、古墳時代前期のように空白に近い時代とも言える。隠岐国庁、隠岐国の各郡衙が見つかっていない今、この空白を埋めるためにも、今後の詳細、かつ早急な調査研究に期待したい。これらの解明が、隠岐国の当時代の社会構成はもとより、当時の律令国家の実態把握に果す役割は大きいものと思われる。



※　甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅱより

第5・6調査区遺構配置図

参　考　文　献

隠岐支庁『隠岐島誌』　昭和８年

山本清『隠岐古墳調査報告』　昭和３０年

藤田一枝「隠岐島先史時代の遺跡について」　『隠岐郷土研究』第２号所収　昭和３２年

勝部明生「斉京谷古墳」　関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』所収　昭和４３年

山本清「初期寺院跡」　関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』所収　昭和４３年

松江市教育委員会『出雲国庁発掘調査概報』　昭和４６年

倉吉市教育委員会『伯耆国分寺発掘調査報告Ⅰ』　昭和４６年

山本清「山陰の須恵器」　『山陰古墳文化の研究』所収　昭和４６年

近藤正「隠岐の国で国府を探る」　『季刊文化財』第１５号所収　昭和４６年

隠岐島後教育委員会『隠岐国分尼寺調査報告』　昭和４６年

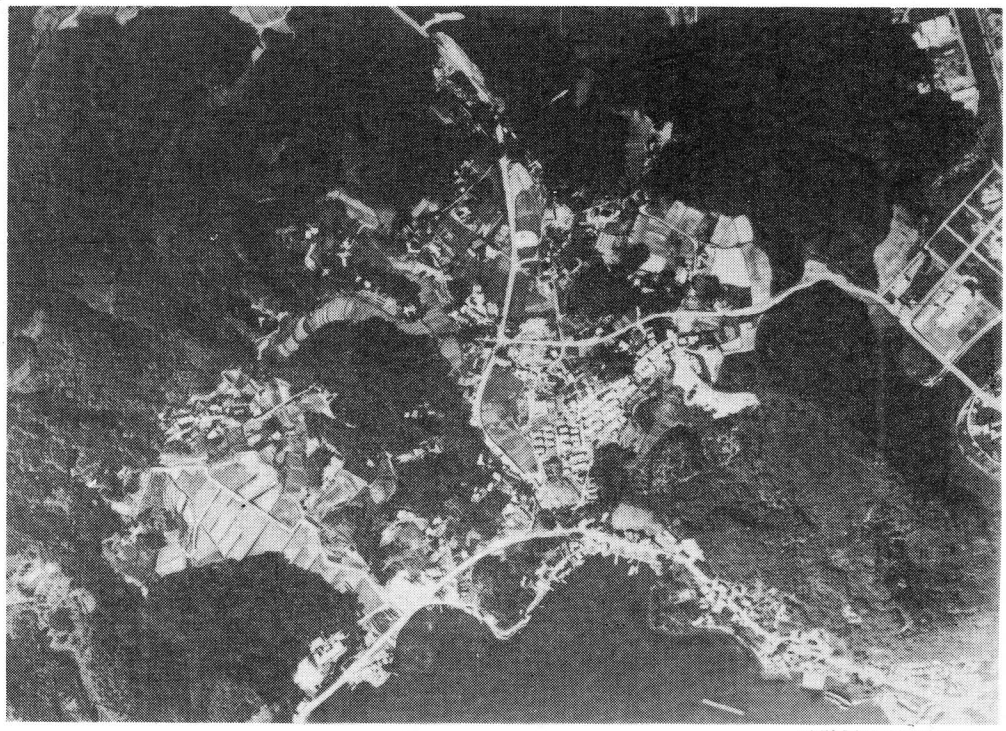
隠岐島後教育委員会『八尾川流域条里制遺跡』　昭和５３年

田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』　昭和５４年

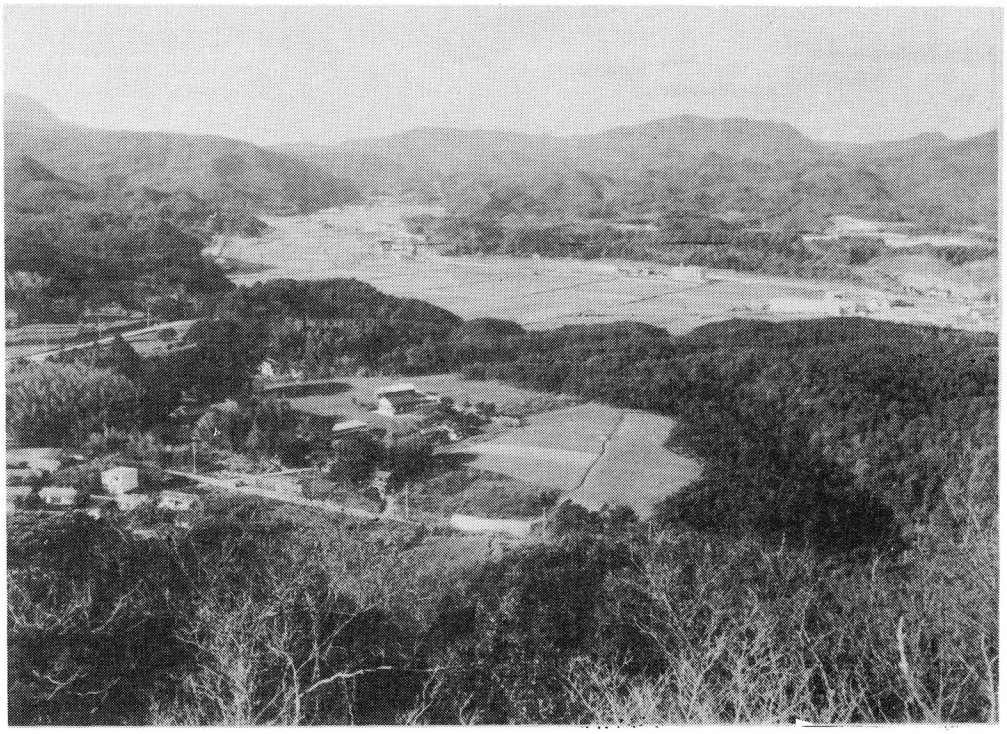
隠岐島後教育委員会『甲ノ原遺跡発掘調査概報』　昭和５５年

隠岐島後教育委員会『甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅱ』　昭和５６年

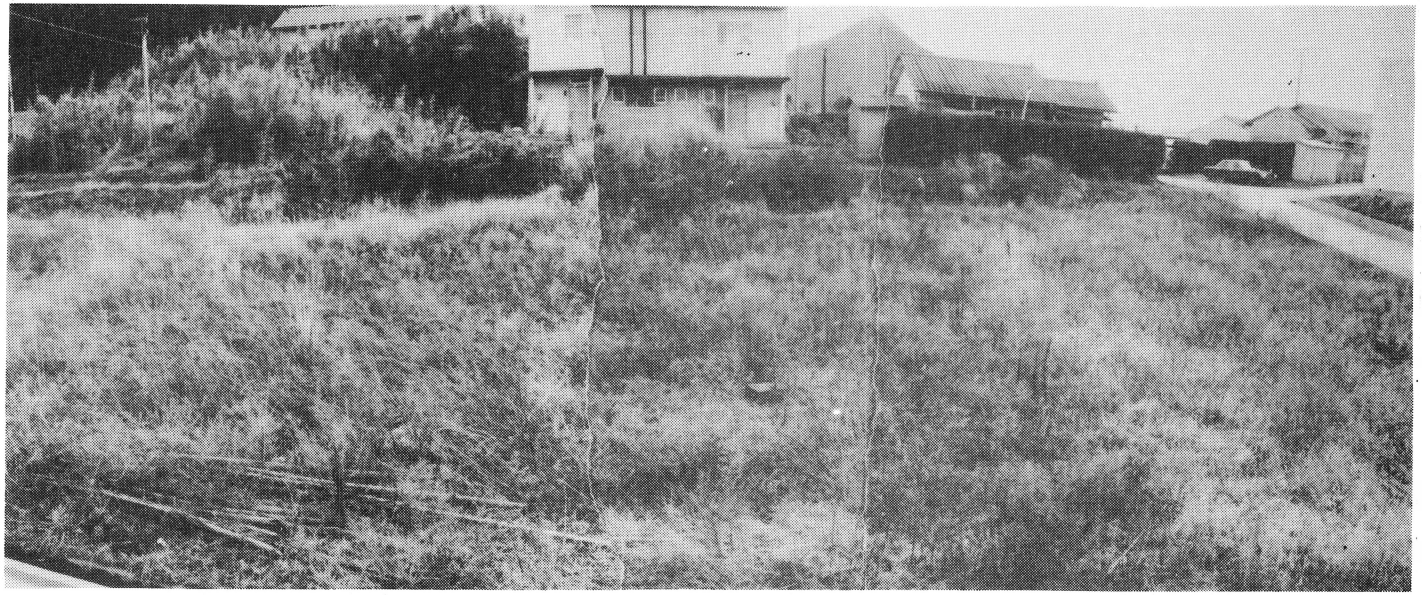
図版 1.

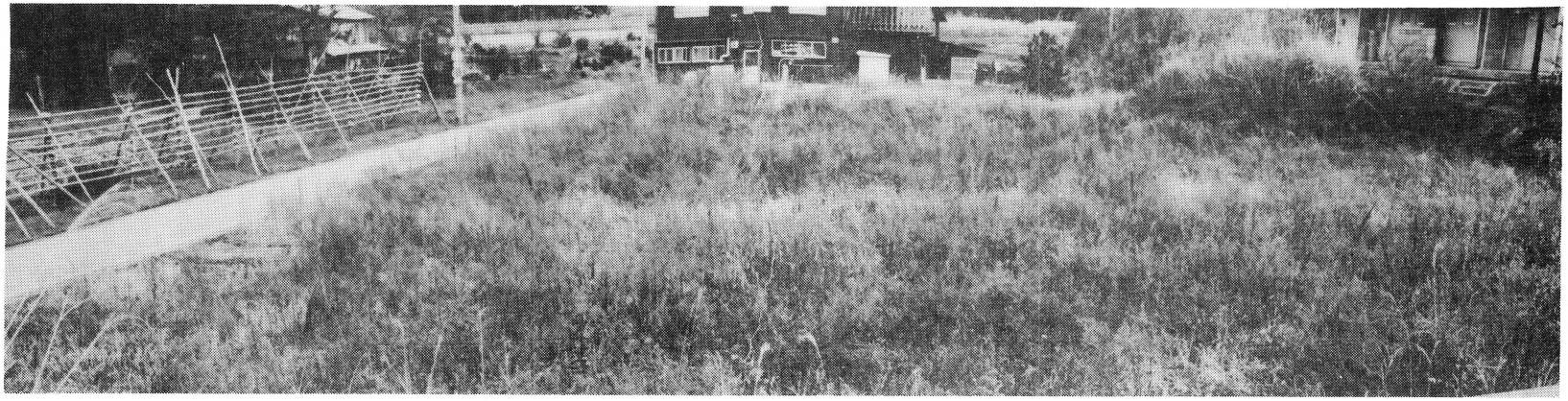


遺跡周辺の航空写真

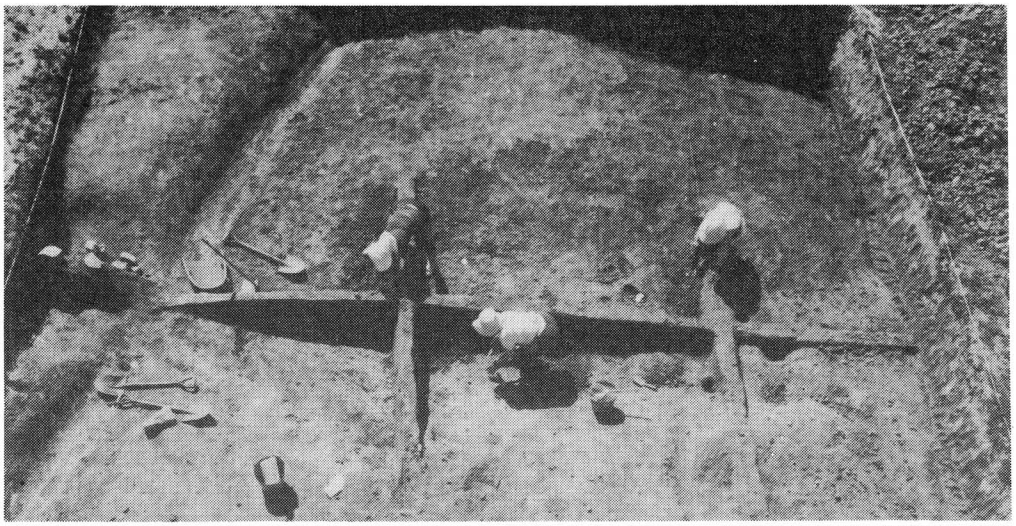


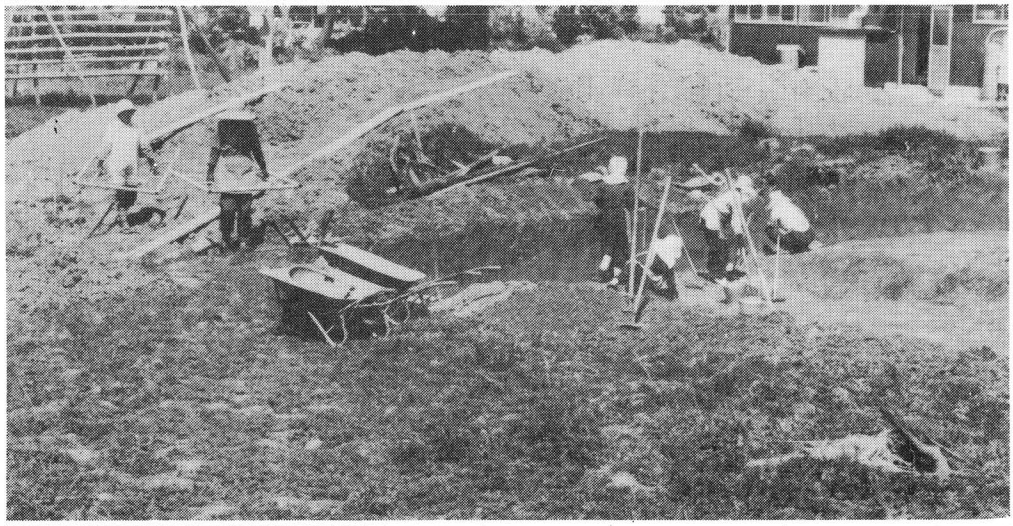
調査対象地遠景（南から）

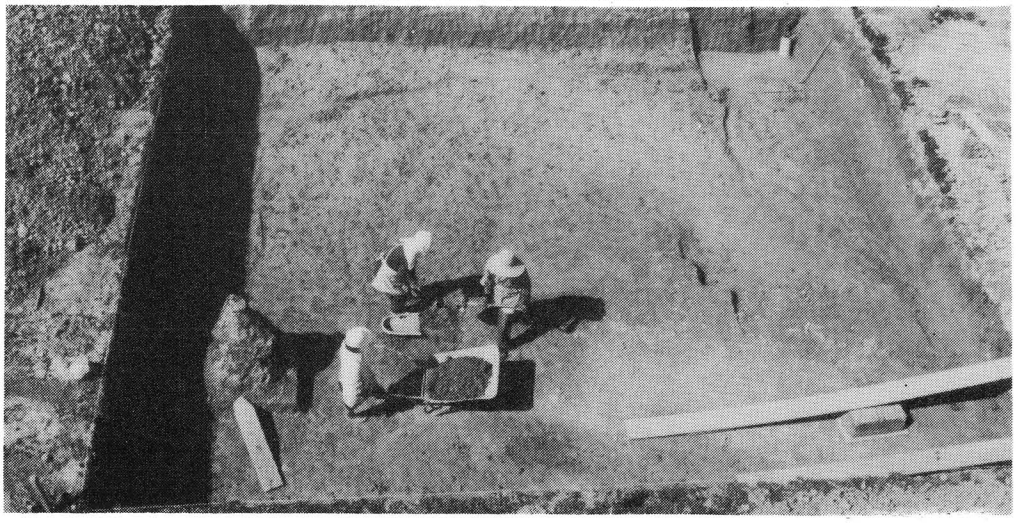




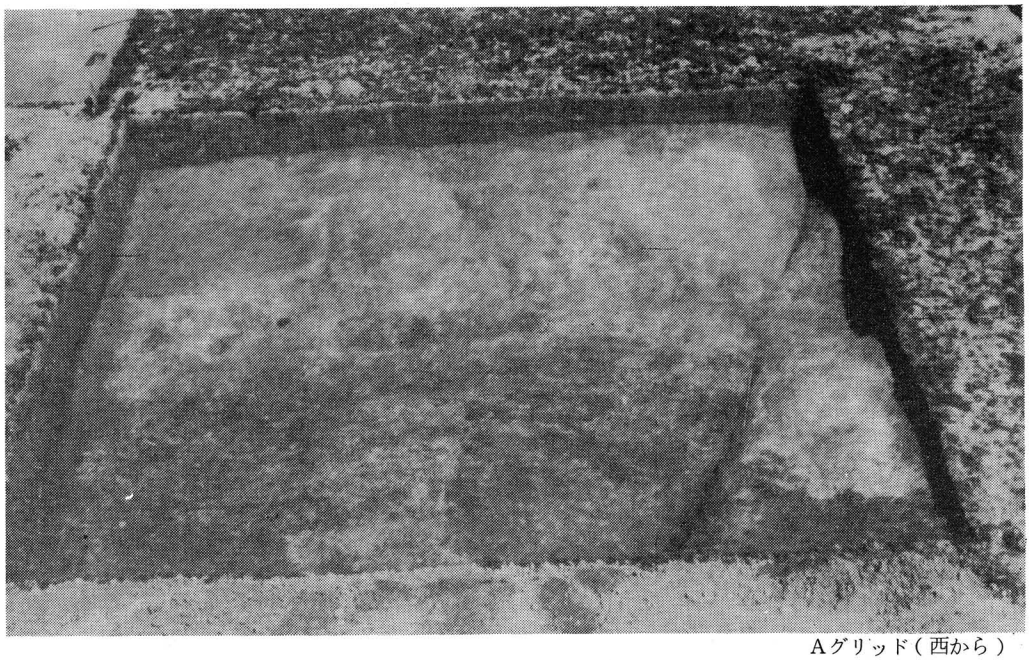
下・（西から）
右・（北から）
調査前風景



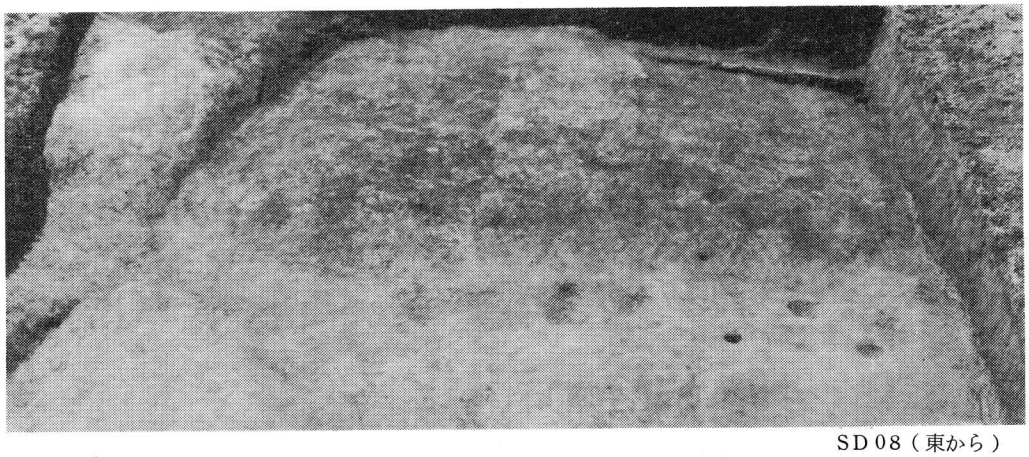




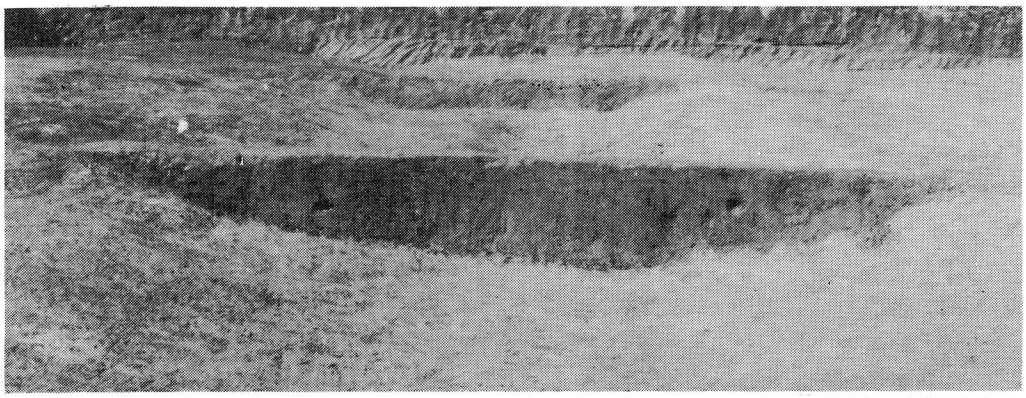
調　査　風　景



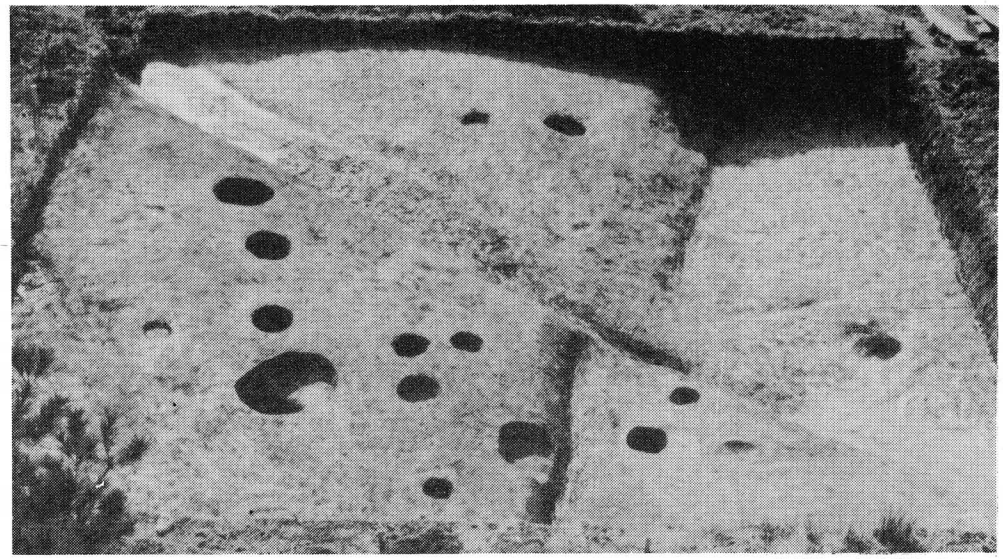
Aグリッド（西から）



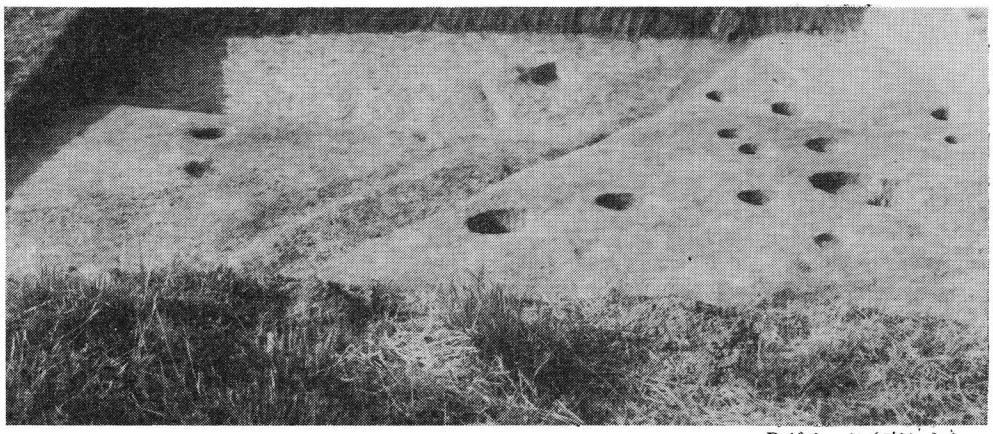
SD08（東から）



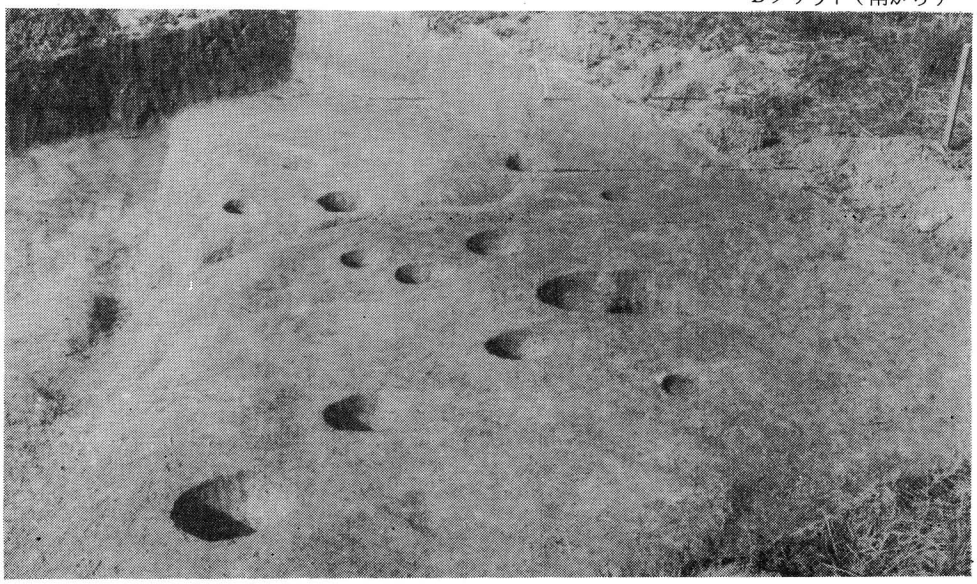
SD08 土層（南から）



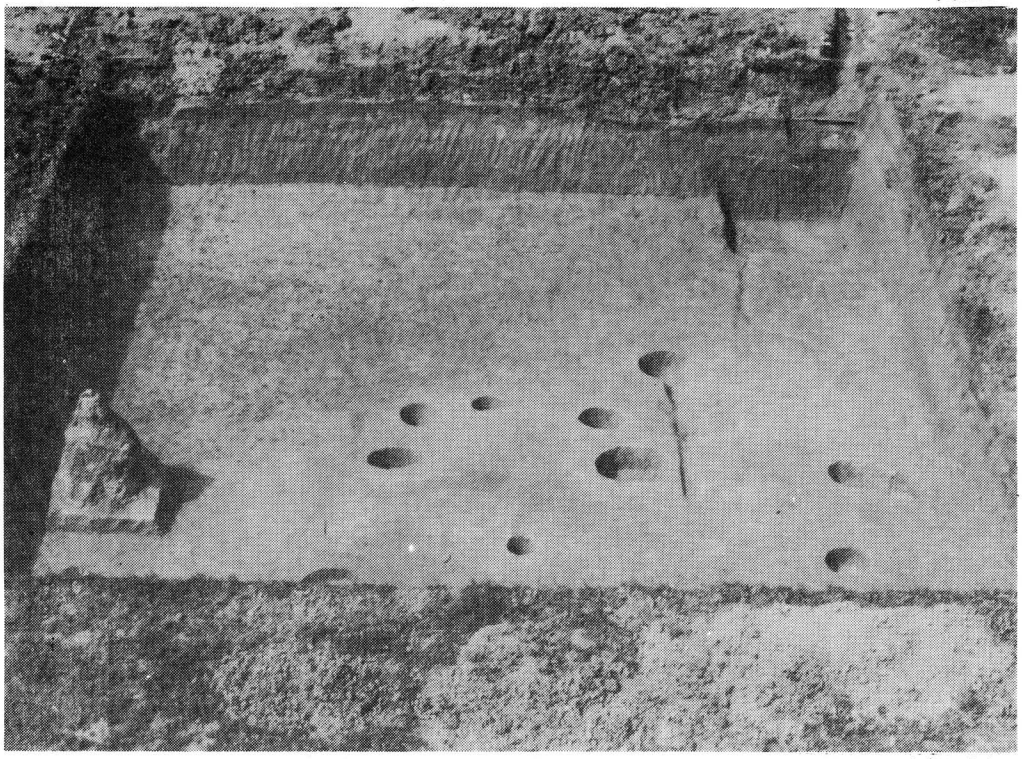
Bグリッド（東から）



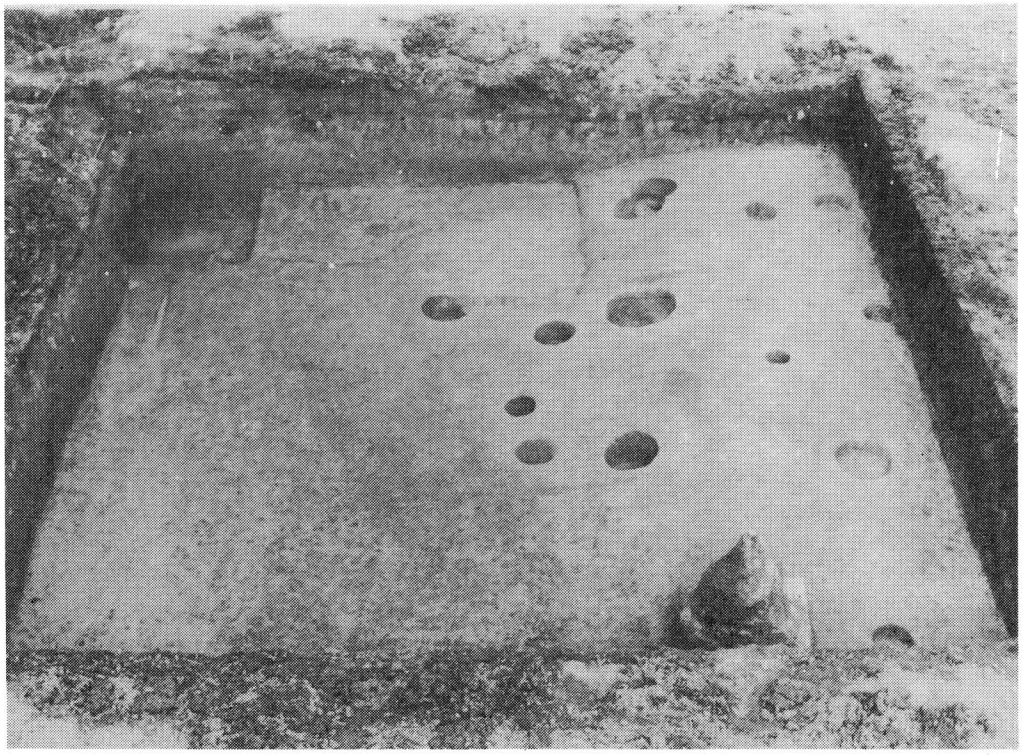
Bグリッド（南から）



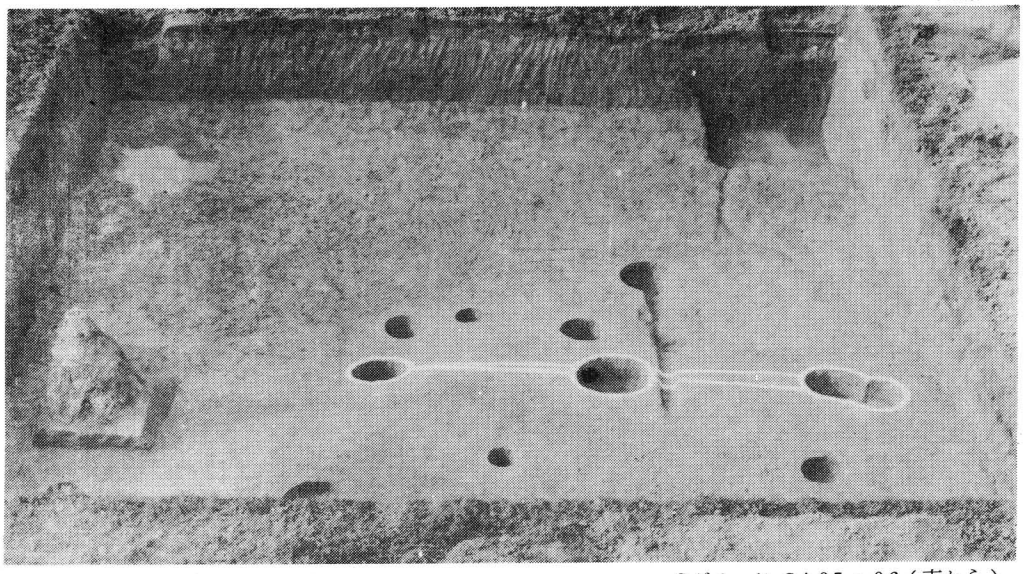
Bグリッド柱穴群（南西から）



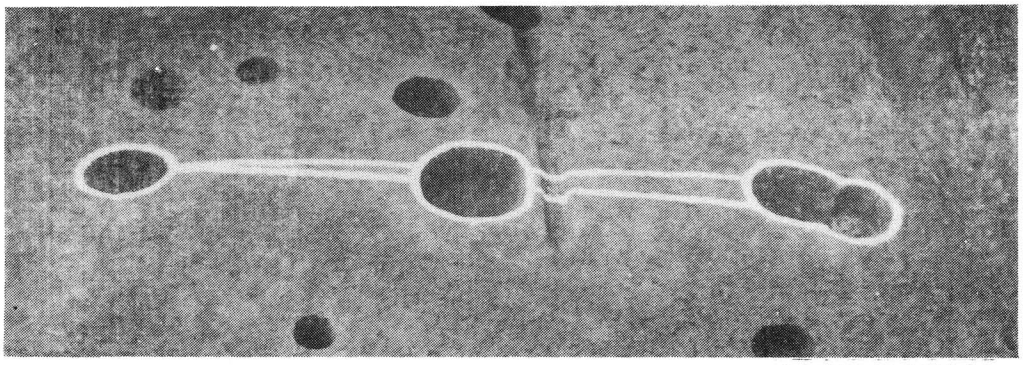
Cグリッド（南から）



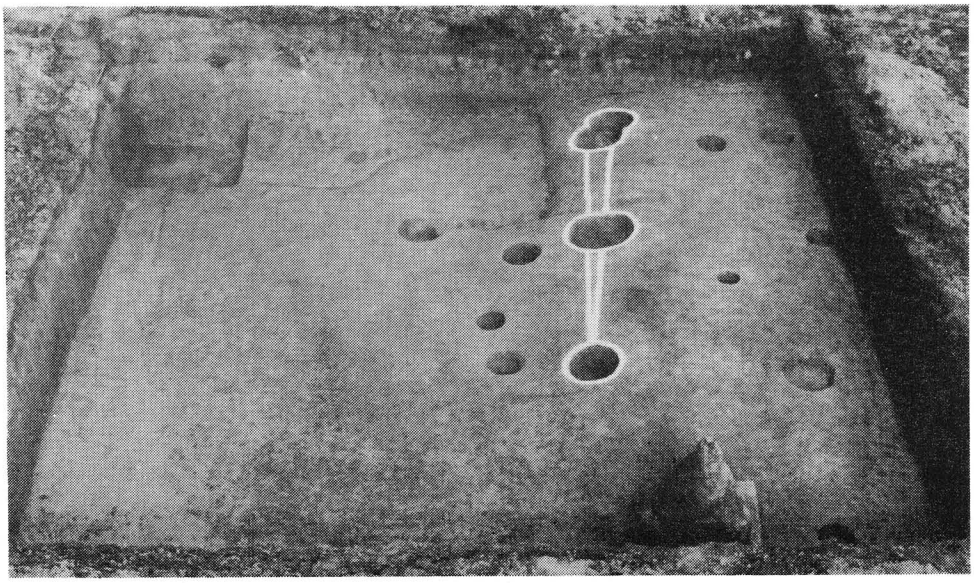
Cグリッド（西から）



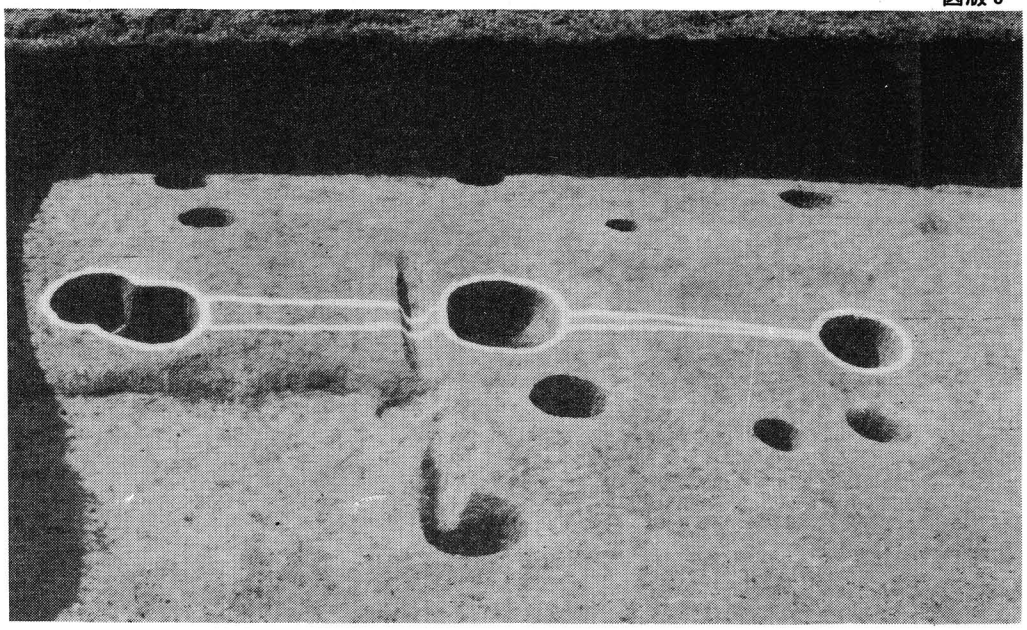
Cグリッド SA05・06（南から）



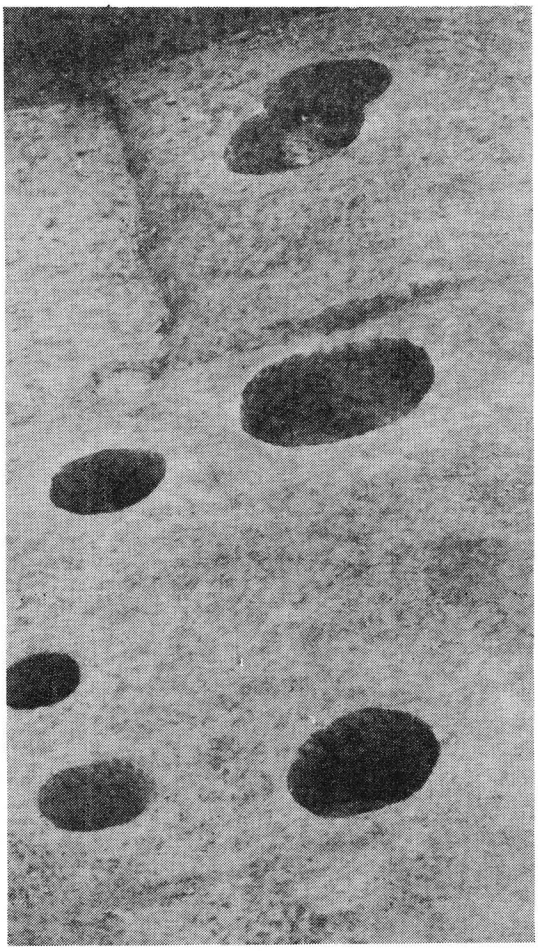
SA05・06（南から）

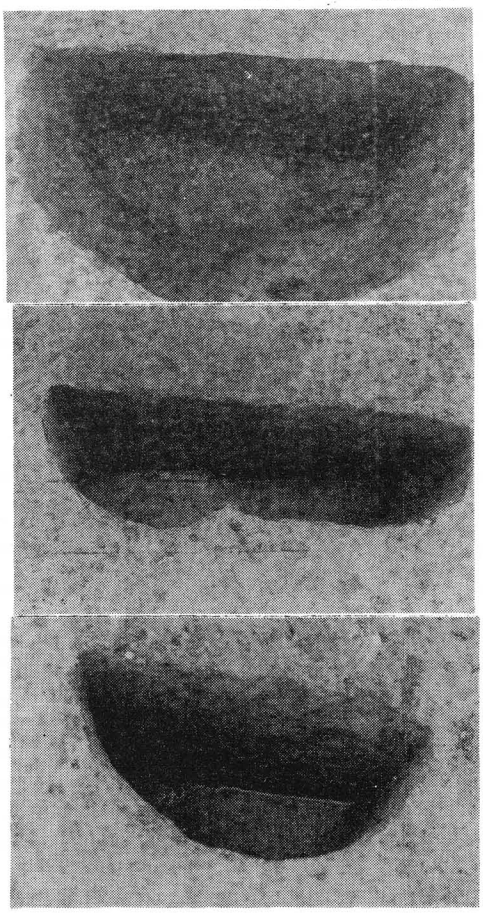


CグリッドSA05・06（西から）

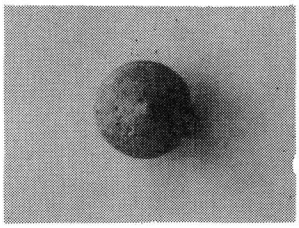


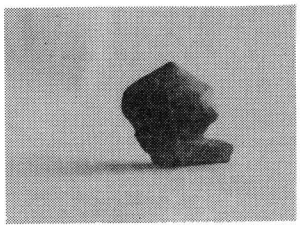
SA05・06（北から）



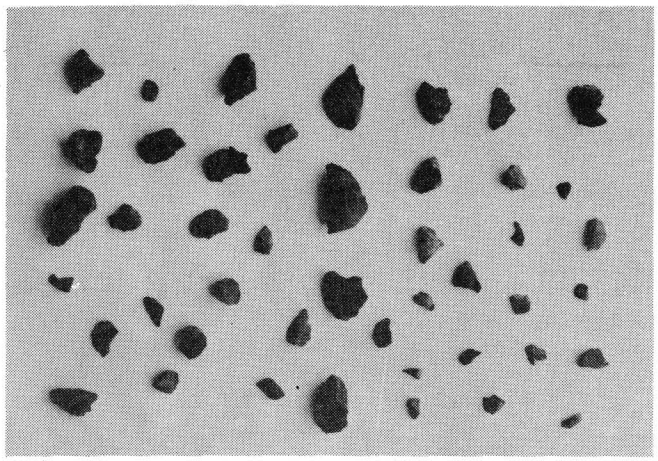


SA05・06柱穴（左：西から，右：南から）



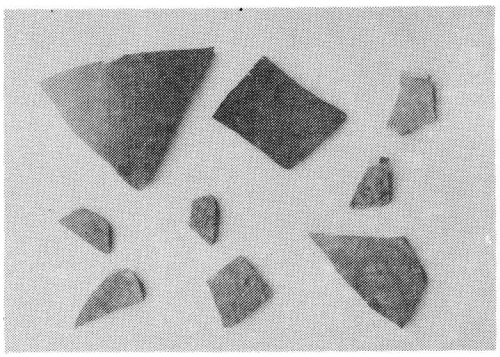


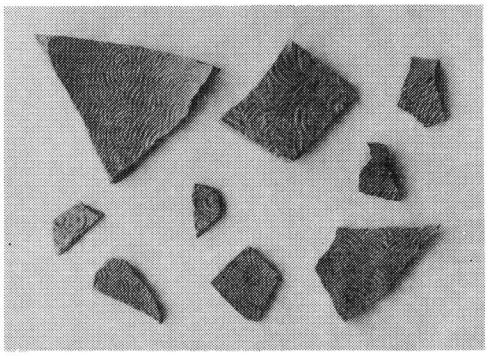
SD08出土



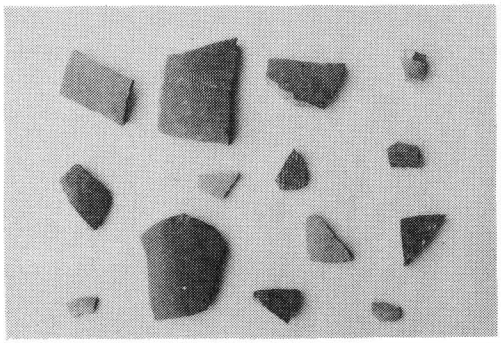
Aグリッド出土

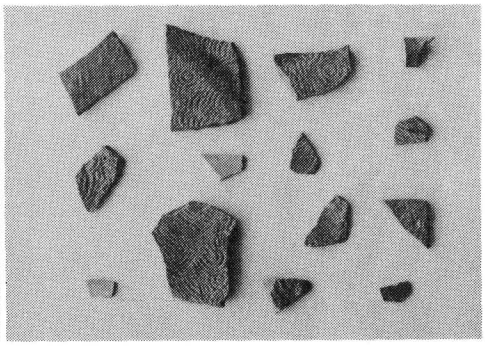
SD08出土（一部）



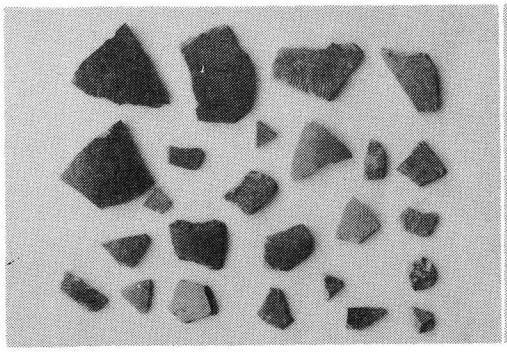


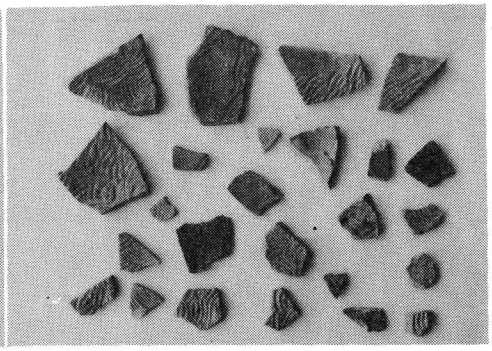
Aグリッド出土（一部）





Cグリッド出土（一部）





甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅳ

編　集　隠岐島後教育委員会
〒685 隠岐郡西郷町西町八尾の一,58
発　行　昭和58年3月31日
印　刷　有限会社　嫁島印刷
〒690 松江市浜乃木町153の11　☎(21)3737